
All Of The World ~ **それが総ての始まり** ~

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

All Of The World（それが総ての始まり）

【Nコード】

N1563Z

【作者名】

流星群

【あらすじ】

膨大な魔力が注がれた釜　？黄金釜（all of the world）？。この釜が母胎に埋め込まれている少女を狙い、様々な？願望？^{ねがい}を持つ人間、あるいは？運命？^{さだめ}の手先　？体現者？^{たいげんしゃ}も奪うために襲撃する中、主人公は命を賭けてヒロインを護り通す、バトル中心の物語

【プロローグ】始まりの刻（前書き）

《まずは作者からの一言》

今作の作品は初めてここで投稿したもので、途中までしか書いておりません。ですが、感想をくださるとありがたいです。読みにくいところや、誤字脱字等もあつたら教えてください。

ちなみに、今話題の某魔術物に似てるかもしれません。結構影響を受けましたので。そこを差し引いての評価をしてくれればありがたいです・・・。

【プロローグ】始まりの刻

それは雪が深々と降り続く真冬の夜の出来事だった。

濃い闇を照らし出したのは、雲一つない空から落ちてきた雷。

一度ならず、二度三度と雷がその屋敷だけを集中的に狙う。

数秒の後、家から火の手が上がった。小さな火の元は木材に移るごとに勢いを増してき、あっという間に炎が家を覆った。

轟々と燃え盛る火柱は天にまで昇る。炎は木材を黒い炭に変え、家中に取り残された人間たちを原型がなくなるまで焼き尽くした。家から飛び火し、雪の積もっていた路面を溶かす。

あらわになった道路は、冬の間、本来の道として使われていなかったことがわかる。

熱い。臭い。苦しい。人々の苦痛の叫び声が、眠ったように静かな夜に響く。

全識衛護ぜんしきえいごと全識宿和ぜんしきしゅわ、そして全識一族の長であり衛護の父である全識重ぜんしきしげの三人は外に出て、少し離れたところから屋敷が倒壊している様子を眺めていた。

炎に巻き込まれずに済んだのは、重が衛護と宿和を連れ出してくれたからだ。

「これは、一体……？ 魔術師が襲ってきたんですか？」

「いいか。衛護、宿和。俺の話をよく聞け。今すぐここから離れる！ 隣町じゃなく、もっと遠くだ。出来れば、こんな片田舎な場所じゃなく、人が沢山いるところへ行け。じゃないと、お前らは奴にすぐに見つかってしまう……！」

衛護の疑問は父の切迫した声で打ち消されてしまった。

普通の人間だったら、恐怖で我をも忘れて逃げ出していただろう。だが、衛護は違った。幼い頃から全識一族の厳しい修行に耐え、肉体だけでなく精神まで鍛え抜かれている。

いかなる出来事も冷静に判断して、最善の手立てを瞬時に考え付

くよう育てられていた。

だから家が燃やされ、親族が殺されたとしても取り乱したりしない。

「奴は、宿和の母胎にある？黄金釜（a l l o f t h e w o r l d）？を狙いに来た。衛護、お前は宿和を護り通せ。絶対に宿和を誰の手にも渡してはならない。自分の命を擲つてでも宿和を護衛し続ける。それがお前に課せられた今回……いや、死ぬまで終わらない役目だ」

重は、覚悟を決めた一人の魔術師の目をしていた。

肩幅の広い衛護の肩を、彼は大きな手で掴み、宿和を頼む、と小さく漏らす。

「これを……。お前に何もしてやれなかったが、残せるモノはどうにか持つてこれた」

そう言つて重は衛護に全識家の家宝、鞘に収まつたままの？永久^{アン}に無錆の新鮮刀？を、懐から取り出し渡した。

永遠に錆びないと謳われている名刀の中の名刀。刃渡りは優に一米ートルを超える大物。名工が造り出したこの刀は魔刀^{まどう}と呼ばれ、普通の刀とは違い魔術専門の武器である。魔術武装は、魔術を送り込むことで真価を発揮する特殊な武器。

全識家の秘宝でもあるその刀を衛護は握り締める。無念を懷いて死んでいった一族の想いが手に重く押し掛かった。鞘に付いていた紐を肩に通して掛ける。

更に重は携帯していた二丁の自動式拳銃を手渡した。一つはデザート・イーグル。もう一つはサイレンサーとレーザー・ポインター付きスミス&ウェットソン。どちらの拳銃も重が名工に頼んで改良してもらった魔術武装。それら二つの武器は衛護の父である重の愛用品で、彼の命より大事な物である。

ホルスターに入っていた二丁の拳銃を受け取り、衛護は左右の腰に取り付けた。しつくりときた拳銃との相性は、まるで元から衛護の物だったかのよう。

「お前に魔術武装を託す。宿和を護るために強い力となってくれ
はずだ。……金もないと困るからな、これも預ける。一族の全財産
が入ってる。大事に使ってくれ」

大きな巾着袋を衛護は恐る恐る受け取り、黒のロングコートの懐
にしまった。

「……ありがとうございます。お父さん、僕は宿和さんを全力で護
り通します」

「うん、そうか。お前も立派に育ったな。今では俺を超える大物の
魔術師になった。将来が有望な人間になってくれて、父親である俺
としては鼻が高い……」

初めて笑った父を衛護は見た。いつも厳格だった重は息子の衛護
に対して一度たりとも笑顔を見せたことはない。厳しい教育を受け
てきた衛護にとって重という者は、畏怖の対象だった。

それが今、重は昔話でも聞かせるかのように優しい声音で衛護に
話し掛ける。

重がどれほど息子に対して期待していたのか、たった今見せた笑
顔だけで衛護は知ることとなった。

「宿和、絶対に奴から逃げるんだ。奴の狙いはお前一人だけ。その
身に宿す膨大な魔力の塊 黄金釜 (a l l o f t h e w o
r l d) を奪いに来た。いいか。きつい言い方になってしまいが、
お前は死んではならない。死ぬようなことがあつたら衛護を身代わ
りにしろ」

重の視線が衛護の後ろで小さく隠れていた宿和に向けられる。

宿和がびくつと震えたのが衛護の背中越しから伝わった。果たし
て、その反応は寒さゆえからなのか。

全識一族の三代目の代から生きている、見た目十五歳の少女。普
通なら宿和は四百歳を越えている。だが黄金釜 (a l l o f t
h e w o r l d) の影響で、肉体的にも精神的にも十五歳のまま
止まっていた。

「宿和、これだけは聞いてくれ。お前の身体の中にあるモノはな、

全識一族の？願望^{ねがい}？が詰まっている。俺のお父さんや、お爺さん。更にはもつと上の代の魔術師たちが自分の命と引き換えに魔力を注ぎ込んだ奇蹟を起こせる代物。大事なモノなんだ……」

白い吐息を吐きながら、重は話しを続けた。

「我々全識一族の願望^{ねがい}は？運命^{さだめ}？から解放されることだ。人間の自由を束縛するヤツらから自由を取り返すのが、俺ら全識一族の望み。お前が命運を握っているんだ、宿和。だから、どうか一族の願望^{ねがい}を叶えてくれ……！」

願望^{ねがい}が果たされたときに重自身がないのが悔しいようだった。

話しを聞いていた宿和は、衛護のコートをぎゅっと強く掴んだまま何も語らない。

重の言葉を理解したのかどうかは、彼女の表情を見る限りではわからなかった。

「奴は人間ではない。人を超越した怪物だ。単独で全識家に奇襲し、一瞬のうちに一族全員を惨殺した。そんな奴を俺は放って置けない。一族の仇と、お前らを逃がすために少しでも足止め出来るなら……」
重はざっと雪を踏みしめて、衛護たちに背中を向けた。

大きな背中からは絶対にここを護り通すと決めた重の信念が伝わってくる。

「ゆけっ！早く！」

重が叫んだ直後、猛火に包まれていた家が無残にも崩れ落ちた。長かった魔術師の歴史も、突然顕れた人外の手によって幕を閉じる。

全識一族は魔術師の血統で、魔術の世界では有名な家系だった。でも彼らは世間の目から逃れるように田舎町へ移り住む。時代が時代で、科学万能な現代では魔術は異端者と看做されているからだ。時に魔道と呼ばれ、魔術師は人ならざる者というのが人々の共通認識となった。

人外が襲撃したのは、山奥に家を建てて魔術の探究をひっそりと続けていた矢先の出来事。

「行きますよ、宿和さん」

「うん……」

こくりと頷いた宿和は、鍵形のネックレスを大事そうに握っていた。

衛護はネックレスを持っていた手と反対の手を掴み、走り出した。暖かい体温が彼女の小さな手から感じられる。

冷たい風に煽られながら、衛護と宿和の二人は山を下っていく。走っている最中、衛護は一度だけ振り返り父の姿を見た。

誰よりも厳しく、誰よりも特別だった存在。全部愛情表現の裏返しだったのかもしれない、と衛護はふとそう思った。根拠はない。でも不器用な重のことだから素直に愛情を注げなかったのだろう。

衛護と宿和の二人だけになってしまった全識家の血統。

重の生死は屋敷から遠く離れたところまで来た衛護に知る術はない。襲撃者と対決し、殺ろされてしまったかもしれない。

突如、沸き起こった想いに衛護は自分自身でさえ驚いた。衛護の願望^{ねがい}、それは一族の復興。崩壊した全識家を元に戻すこと。

厳しかった全識家の教育や修練は決して良かったと言えない。だが全識家が滅びていくところを目の当たりにした衛護の胸はぼつかりと穴が空いていた。

あまり感情を面に出さない衛護でも、感情はある。悲しい、寂しい、辛い、それらが今の衛護の感情だった。

走りながら、横を向く。懸命に衛護に着いてくる宿和。

彼女の願望^{ねがい}とは一体なんなんだろう？

衛護は今すぐ訊きたくなかったが、息の上がった宿和に尋ねるわけにもいかない。この逃亡生活が終わってから訊こう。

終わりの見えない道程に、衛護と宿和は同時に一歩踏み出した。

【第一章】

地獄の業火の夜からあつという間に半年が経った。肌寒かった冬から、じめつとした夏へと変貌を遂げる。

全識衛護と全識宿和は故郷から遠く離れた集星市つぎほしに行き着く。

父であつた全識重の言い付けを守り、衛護は都会のマンションの一室を隠れ蓑として借りて、長期滞在することにした。

今、衛護は一人で昼飯を買いに外を出歩いている。

宿和はマンションで大人しくお留守番。いつ彼女を狙う者が顕れるかわからないからだ。むやみやたらに彼女を連れて歩けない。とは言つてもさすがは都会。人の往来が激しい昼間に奇襲する輩はいないだろう。

ビルが立ち並ぶ大通りを散策していると、人々の視線がやたらと向けられる。通り過ぎる人通り過ぎる人が変な目で衛護を見る。

気になって衛護は自分の身体を確認する。納得した。衛護は冬服だったのだ。夏の日差しが降り注ぐ中、衛護は真っ黒のジャンパーを着ていた。

変態の類でない限り、七月も半ばに差し掛かったこの時期に冬服を着ている兵はいない。

「仕方ない、夏服を買いますか。体温調節を自由に行えるよう修練で身につけましたが、注目を集めるのはよくないですね……。ついでに、宿和さんの服も調達しましょう。でないと、彼女と出歩けません」

そうと決まれば衛護は近場の服屋に立ち寄った。

店内は直射日光を遮ってくれて、エアコンのお陰が涼しい。

やはりここでも衛護は人の目が気になった。でも、それも一瞬のこと。買い物客に紛れ込めば視線は薄くなる。

衛護は自分の服を適当に取って買い物籠に入れていく。次に女の子向けの衣服を覗きに行けばカップルらしき二人の買い物客が言い

争っていた。

二人とも制服を着ていた。どうやら学生のような。学校帰りに立ち寄ったのだろう。

「俺はこれが似合おうと思うんだけど。着てみてくれよ」

「なんで、あんたなんかのために着なきゃならないの？ いいの。自分で決めた服が一番なんだから」

「お願い！ 一生のお願いだ！ これを着てみてくれ！」

そう言っただけである金髪の男が一着の服を女の子に見せた。茶髪の女の子が「ええー」としかめっ面で抗議する。

「こんな肌の露出が多い服は、わたしには似合わないの！ だから着ないよっ！ そういうの着るのは好きな人の前だけ！」

茶髪の女の子にきっぱりと振られてしまった金髪の男。がっくりと肩を落としていた姿は哀愁が漂う。

可哀相に思いつつも、でも衛護は関わり合いを持たぬよう気配を消して、宿和に似合いそうな服を求めている。

「ねえ、何探してるの？」

「えっ……？」

声を掛けられ振り返れば、そこには先程の茶髪の女の子がいた。衛護を見上げながら、笑顔で訊いてくる。

「い、意外にカッコいいかも……」

「おいおい！ 何してるんだよ、くくりは！ 見ず知らずの人にいきなり声を掛けるなんて」

「いいじゃない。女の子の服で苦労しているみだから、わたしが手伝ってあげようと思っただけよ」

「余計なお節介だろ。彼女がいるだろ、ふっ！。服のことは彼女に任せておけばいいって」

買い物籠を手にはぶら下げた金髪の男が慌てて衛護のところへやってくる。初めて対峙した金髪の男は、頭の上にサングラスを置き、制服を着崩したように見てもチャラ男。

どうもすいません、と謝りながらチャラ男は、くくりと呼ばれた

女の子の腕を引っ張る。が、

「ねえ、ほんとに彼女と二人で来たの？ にしては彼女さんの姿が見えないけど？」

きよろきよろと周辺を見回すくくり。肩口で揃えた髪の毛からシヤンプーのいい香りが漂ってくる。

「いいえ、僕は一人で来ました。貴方が察した通り、どの服を選べばいいのかいまいちわからないんです」

「ほら、やっぱり！ 倉の嘘付き！」

満面の笑顔を作るくくり、衛護は一步後ずさる。

人との接触は控えたかったが、こればかりはどうしようもない。

男物の服とは違い、女の子向けの衣服は山ほどあり、どれを買えばいいのか迷っていた。

「ちえっ、まったく。放っておけばいいのによお。困ってる人を見ると直ぐに世話を焼きたくなる性格をどうにかしろ！」

「人と人は手を取り合って助け合うもんだよ。倉も優しい男の子になろうねー？」

「そうじゃなくてさ、よく見ず知らずの人間においそれと抵抗感もなく話しかけられるな、と思ってだな。そんなんじやいつか悪い男の人に連れ去れるぞ？」

「そんな時は、わたしを連れ戻してその悪い男をやっつけてよ。そのための彼氏が出来るまでのボディガード役でしょ？」

「う、うん……。そう言ったらそうなんだが……。俺の気持ちも察してくれよな……」

「なんか言った？」

「なんでもない。いい加減、彼の話を訊いてやれよ」

「ああっ！ そうだった。ごめんね」

倉と呼ばれた男から、衛護に向き直り、ぺこりと頭を下げるくくり。

「いいえ、大丈夫です。頭を上げてください」

宿和の畏まった態度に、衛護は慌てて両手を振る。

「それより、仲のいいカップルですね」

「えっ？」

「おい……」

倉とくくりは、二人して微妙な反応を見せた。どうやら言うてはいけないことを言うてしまったらしい。カップルではないのか。ではなんだろうかと衛護は思ったが、問い質すことは止めにした。微妙な空気を感じ取ったからだ。

「で、誰に向けてのプレゼントなの？」

「プレゼントではないです。僕の服を買うついでに彼女のも買おうかなと思ひまして。その、彼女は僕の……」

その先に続く言葉を濁す。宿和と自分の関係はなんなのか、衛護自身が一番わからなかった。目の前の二人のように（彼らは認めていないが）カップルっぽくはない。だが十六年もの間顔を合わせていた衛護と宿和の関係は、他人と呼べるはずもなく、恋人と定義するには曖昧。

「仲間、ですかね」

「仲間ねー。学校の友達、とか？」

「違います。僕は学校へは行っていません」

「ええっ！ 行ってないの？」

しまった、と衛護は思った。このぐらいの年齢の子ならば学校へ通っているのが当たり前。けれど衛護が住んでいたのは山奥の田舎町。学校は周辺にはなく、家から一歩も出ることを禁じられていたため、一族の中で教師勤めをしていた魔術師に衛護は教えられていた。

勉強の飲み込みが早かった衛護は大学までの勉強過程を終了し、でもまだ学び足りなかったからあらゆる参考文献を開き貪欲なまでに知識を詰め込んでいった。

そして衛護はわずか十六歳にして、全識一族の誰よりも博識になっていた。教師担当していた魔術師は衛護の学ぶ姿勢に対して畏怖さえ覚えたと言っていたことを思い出す。

「ああ、ここいらに引つ越したばかりなんです。高校はどこにしようか悩んでまして」

瞬時に言い訳を考え付き、貌には動揺の一切を見せなかった。

「なーんだ、そういうこと。てつきり不良少年かと思ったよ」

口から出任せを言ったのにくくりは納得してくれた。ぶんぶん頭を上下に振つて了承の意思表示をしている。

「ふん、んなことありえるかよ」

そう倉は言い捨て、サングラスを掛けて衛護を見据える。サングラス越しからでも解る鋭い眼光。

「じゃあ、うちの学校きなよっ！？私立集星学校？に！いいところだよー。倉みたい馬鹿な奴が多いけど、でも校則は緩る緩るで愉しいよ！それに、恋愛おつけーだし！わたしがきみとその噂の女仲間さんの恋を成就させてあげるよ！」

「いや、だから、僕と彼女はそういう関係じゃ……」

「おい、もうよせよ、くくり。困り果ててるだろ。ごめんな。俺の幼馴染み……が、煩くて」

間に取り持った倉だったが、何故か「幼馴染み」と呼ぶ時の声の音量が小さい。

直ぐにそれがなんなのかを察した衛護は、彼にも彼なりの葛藤があるのだろう、と思うことにした。だから、衛護が先程『仲のいいカップルですね』と言った時に、微妙な雰囲気が漂ったのだろう。

「あつ、元々の話から大分それちゃったね。ごめんね。じゃあ、女仲間似合った服を探してくる！」

「お願いします……」

くくりの性格に多少の不安に苛まれながらも、衛護は彼女に総てを任せた。

衛護が選んだ服はきつと宿和の反感を買うことになる。もつといいのがあったと思うけど？と詰問されるのが目に見えている。それだったら女の子に頼んでもらった方がいい。

衛護より同姓のくくりの方が女性服に関して詳しいからだ。

「完全に人との関わり合いを離れるのは無理か……」

人との接触を絶つつもりでいたのに、こうしてもう二人の人間と関係を持ってしまった。

これも何かの縁なのかもしれない。そう思うことにした。どうせここを出たら、もう一生逢うこともないだろう。だったら今彼らのお言葉に存分に甘えさせてもらうべきだ。

「これと、これと……えいっ！ これも！」

次々と衛護の持っていた買い物籠にくくりが洋服を入れていく。いくら金はまだ沢山あるからといって、衝動買いするつもりは毛頭ほどない。

一着ぐらいで充分だ。集星市に長期滞在するからといっても、まだどこかへ移り住むことになる。そうなれば荷物は少ないに越したことはない。一定の場所に留まることは危険。何せ、今もお衛護たちは追われている身なのだから。

「そういえばお金の方は大丈夫？ 結構籠に詰め込んだけど

……」

「出来れば上下合わせて一着でよかったです」

「えっ？ それだけでよかったの？ なーんだ。最近のトレンドを取り入れた可愛い服全部持ってきたよ。早く言ってよね、きみっ」

「ごめんなさい……」

衛護の隣なりにいた倉が「はぁー」と深い溜息を吐き、首を横に振る。

彼のいつもの苦労がヒシヒシと伝わってきた。

「今日はどうもありがとうございました」

衛護の手には手提げ袋。やつとの思いで買った服が入っている。くくりたちのお陰だった。だから衛護は頭を下げて感謝の意を示した。

「いえいえ、お役に立ててよかったよ」

頭を上げると、くくりは頬を赤く染めながら頭を掻いていた。

宿和の服を買っただけだったのに衛護は二時間近くも店内にいた。くくりが親切心で宿和の服を選んでいるのは知っていたが、いくらなんでも時間を掛けすぎた。店内の柱時計が十二時を示してから、やっと店を出る。

きっと宿和はお腹すかせたライオンのように唸っているだろう。

家に帰れば彼女から山ほど愚痴を聞かされる。

「じゃあ、わたしたちはこれで！」

「またな」

くくりと倉は手を振り、衛護に別れを告げた。

「……また、どこかで」

衛護も彼らに挨拶をして背を向けた。もう二度と逢うことはないだろうと、心の中で思いながら歩を進めた。

「そういえば、彼らの名前を訊いていませんでした」

いくら最後の別れだからといって、よくしてもらった彼らの名前を知らないのは失礼に当たる。

振り返る。くくりと倉の姿はない。衛護は彼らがいると思ってしまった。どうしていると期待してしまったのだろうか。

ああ、なんだ。その感情を識るのは至極簡単なことだった。自分のことは自分が一番理解している。決して面に感情が顕れない衛護でも、それがなんなのかわかっていた。

「……僕は寂しかったんですね。彼らがいなくなってしまうことが」
衛護にとって学校とは同年代の生徒たちが集まり、友達を作り、その友達と一緒に談笑して青春の汗を共に流し、たまに夜遊びして過ごす夢のような場所。

それが衛護の認識。総て参考文献を開いて聞き齧った知識。一度も学校へ行ったことがないため、一体どういうところなのか想像で補うしかなかった。

同年代に見えるのが唯一宿和だけだった。でも友達と言える関係ではない。しつくりきた言葉は主人と奴隷。宿和のために命を捧げ

る覚悟をした衛護にとって、彼女は絶対に護るべき主。

「宿和さんを待たせてはいけない。急がなければ。腹が空きすぎて倒れてるかもしれない」

思考に耽っていた頭を振り、止まっていた足をまた動かす。

帰路に着く手前、デパートに寄り適当に食料を買い込む。まるで主婦のように大量の手提げ袋を両手に持ち歩く。

マンションの五階へ来た衛護はドアの前に立つ。

「呪文（spell） 限定解除（limit cancel）」

魔術を発動するために衛護は？まじょちよくこ魔力貯蓄庫？と呼ばれる、マナを溜め込むための器官に働きかける。

魔力貯蓄子は人間ならば誰しもある器官。

それはバケツのようなもので、そこに一定の水を上入れると溢れてしまうように、魔力貯蓄庫にも入りきるマナキャパシテイの上限がある。

魔力貯蓄庫の大きさは、魔術師の歴史が長いか浅いかで変わる。

歴史の長い家系で産まれた衛護の器官は普通の人間より三倍近くもある。父である全識重から血を濃く受け継いだ衛護は、魔術師になるべくしてなったと言えよう。

魔力貯蓄庫にあるマナの一部を人間界の条理に変換し、魔力を体内で生成する。魔術は、作り上げた魔力を体外に出すことで発動する。

それらの過程を僅か二秒で衛護はやってのける。

すると、ガチャリと音を立てて玄関の鍵が開く。

衛護が詠唱した呪文ではないと決して開けられないよう、魔術結界をドアに敷いていた。

「……っ」

直後、注射を刺されたようなちくつとした痛みが手に走り、爪の部分に新たな？蒼い痣（stigma）？が浮かび上がる。

打撲したときのように身体が青く変色した現象を 蒼い痣（stigma）と、魔術師の間ではそう呼ばれている。と同時に、その痣は魔術師である絶対的な証。魔術を行使すると必ず出来るから

だ。

蒼い痣（stigma）の別名、？死の刻印？は魔術師にとって誇りでもあり、恐怖でもある。魔術を一度でも使ったモノは、不可避の？死の運命^{さだめ}？に巻き込まれるからだ。

死の運命^{さだめ}は、魔術を使用するための必須条件であり、代償行為のこと。人が死ぬのは、寿命、がん、事故など様々だが、死ぬべき時間の速度を速めることにより、魔術を発動する。

一年後死ぬのがその人の決められた運命だったとする。しかし、魔術を行使用すると、半年後に死ぬことになる。死ぬ速度がどこまで速まるかは、使用した魔術の程度で決まる。

魔術の力が大きければ大きいほど、死ぬ時間はどんどん速まっていく。

魔術は誰にでも簡単に扱え、自分の思い描いた想像物を具現化出来るという一種の奇跡を起こすもの。でも代償として自分の『死という概念の運命^{さだめ}』を捧げる。だから魔術を初めて扱う人間は慎重になる。

結果、自分の命を犠牲にする恐怖が人々を魔術の世界から遠ざけ、科学の力に頼る原因となっている。

魔術を使えば使うほど代償が大きいことを衛護は百も承知している。それでも魔術師の家系で育ち、宿和を護れと重からの、一族全てからの命令があったから使わざるを得なかった。

「これで、合計四つ目の蒼い痣（stigma）か……」

まだ全部爪にしか顕れていない。でもこれから魔術を発動すればするほど蒼い痣（stigma）は衛護の身体を蝕んでいくだろう。魔術の発動は極力控えたかったが、宿和の安全を考慮すればそんな悠長なこと言っていられない。

「ただいま戻りました」

扉を開けて中に入ると、玄関口には一組の小さな靴があった。衛護の他にもう一人ここに住んでいる同居人の物だ。

「おっそおおおおおおおおおおおおい」

ツインテールの少女は長い髪を揺らしながらパタパタと衛護に近づいてくる。鼻が高く、フランス人形のように整った顔が迫り、黄金色の大きな瞳で衛護を睨み付ける。

「一体どこをほっつき歩いてたわけ!？」

「ちよつと買ひ物が梃子摺りまして遅くなつてしまいました。申し訳ございません」

「なんで昼飯買っただけでこんなに時間が掛かるの! 腹が減つて死んじゃうところだったじゃん!」

頬を一杯膨らませて、宿和は声を荒げる。

「……すいません」

「それより、荷物多くない？」

宿和が興味深げに衛護の手元へと視線を向ける。人差し指をこめかみに当てて首を傾げると、透き通るほど美しい銀の髪が揺れた。

「はい、これ宿和さんのです」

持っていた袋のうちの一つを、衛護は彼女に渡す。

「えっ、私の? いらないよ、食材は。そんな物もらつても嬉しくない!」

「違いますよ。服、です」

そう衛護が言った直後、宿和は黄金色の瞳を輝かせて、袋を引手繰った。

袋を開けて、中の物を取り出す。花柄模様のワンピースが出てきた。

「これ、今着ていい?」

「どうぞ。但し、ご飯を食べるときは注意してください。汚れてしまいますので」

「うん! ありがと、衛護!」

花がパツと咲いたように宿和は満面の笑みを見せ、玄関の直ぐ真横の部屋に入る。

「ふう。気に入ってくれてよかったです。これもくくりさんのお陰……ですか」

衛護は安堵の溜息を漏らす。靴を脱ぎ捨てて家にかかる。

マンションなのに、二人で暮らには申し分ないほどここは広い。全識家の屋敷よりかは狭いが、でも使い勝手が悪いわけではなく、この物件を初見で住もうと即決した。

広さが決定的な要因ではない。全識重の命令で、人の目が多い場所に建ついい立地条件がたまたまここだったのだ。しかも都会なのに何故か月々の家賃や、初期費用までもが安かった。

集星市の中心に位置するマンションが空いていたのは幸運といえよう。

玄関の前の廊下を渡り、居間に続くドアを開ける。

「何にもないですね……」

まだ引越してきたばかりなので、居間にはテーブル以外の物はない。板張りの床へ外から差し込む日差しが室内を照らす。カーテンを取り付けていないため、外から丸見え。ただ、周辺に高層マンションがないので部屋を見られる心配はない。

「さて、と。飯を作りますか」

居間の一角に向かう。申し訳程度に取り付けてあった小型の台所。コートを脱ぎ捨てて、シャツを捲くる。懷から二丁の拳銃と刀を取り出しコートの上に置く。

ややあつて、衛護は自分の右手を見る。そこにはくつきりと浮かび上がる蒼い痣（stigma）。新たに出来た痣のことを宿和は知らない。

その痣を見ればきつと彼女は怒る。また、魔術を使ったの？と問い質されると思い、衛護は今日買った黒の皮手袋をはめた。

「でも、父の言いつけは守らなければなりません。たとえ自分の命が犠牲になったとしても」

それだけは、衛護の譲れない信念だった。せめて、宿和がいる前では、彼女を不安にさせないようにしよう。

思考を打ち切り、手元の料理に集中する。

すると、パタパタと廊下を走る音が聞こえ、ドアが勢い良く放た

れる。

「衛護、飯まだー？」

宿和が可愛い声を弾ませながら尋ねてくる。

飯を作り終えていないことに、彼女が咎めに來たのかと思ったが違った。

「ごめんなさい、まだです。後少しですので待っていてくださいませんか？」

「うん。その代わり料理が出来上がったら、私のファッションを見てよね！」

「わかりました」

どうやら衛護が（くくりが選んだ）買ってきた服を相当気に入ってくれたようだ。

背後から彼女の鼻歌すら聞こえてくる。

それだけで心が和んだ。彼女が喜んでくれるから、衛護は幸せを感じる。

「はい、出来ましたよ」

今日買った紙皿を二枚スーパーの袋から取り出し、そこへ料理を盛り付けていく。

今日は、ミートソーススパゲティ。夏真っ盛りの時期に、昼間から重たい物を食べたら胃もたれする。だから喉を通し易い麺類にした。

「早く早く！ こっちに料理持つてきてよ！」

「わかりました、わかりました」

宿和に急かされ、衛護は慌てて皿を持っていく。

「……」

途端、唾をぐくりと飲み込み、衛護は立ち止まった。

「どう？ 可愛い？」

「……はい」

「もっと感想いってよ。どこがどういいとか言わないと全然伝わってこない」

文句を並べながらも宿和はくるりと一回転して、衛護に全体を見せる。

花柄模様の半袖のワンピースがひらりと宙を舞う。肩から出た腕は、長くてしなやか。黒のハイニーソックスを穿いた足を交差させて、ワンピースの裾を持ち上げる。

衛護はワンピースだけじゃなく、ソックス、靴、そして下着も買っただけだ。もちろん、下着はくくり任せたが。

……美しい。それだけしか思いつかなかった。綺麗なものを見ると何も考えられなくなるというのは、こういうことなのか。

感情の起伏があまりない衛護だからこそ、宿和は多くの言葉を言ってもらいたいのだろう。

「似合ってますよ、とっても。よかった、喜んでくださって。その笑顔を見ただけで満足です」

「えっ、あつ……うん。買ってきてくれてありがとう、衛護」

正直な感想を述べると、宿和は気恥ずかしくなったのか俯く。赤く火照った顔を隠そうとしていていた。

宿和は衛護と違って感情豊かだ。笑ったり、怒ったり、泣いたり表情をころころ変える。けれど、人前では決して本当の自分を曝け出さない。無口で通す。集星市に来る前に、彼女と共に旅をしてきたから衛護は知っていた。

宿和がそうやってしまったのは、全識家の調教のせい。彼女は道具と同等の扱いを受けてきた。絶対に人を信用してはならない、と教え込むためのものである。

でも衛護は彼女とこうして気兼ねなく話している。宿和と同年代で話し易かったというのもあるが、彼女の弱音をいつも衛護が聞いていた。衛護も厳しい教育を受けていたから、宿和の気持ちを誰よりも理解している。だから、衛護の前だと無邪気な姿を晒す。

宿和の性格に一番の影響を与えたのは、屋敷が滅びた夜の日だろう。今まで人の欲望に触れたことはなかったはずだ。だが燃えゆく家を見たときに、人間とは黄金釜（a l l o f t h e w o r

1d)を奪うためならば同じ人間を殺してしまう残忍な生き物だと知った。

「早く食べようよつ。料理が冷めちゃうから」

「あ、うん。そうですね」

思考に耽っていた頭を軽く振り、衛護は料理をテーブルの上に並べて床に座る。

スパゲティーからいい匂いが漂い、食欲をそそる。

「いただきまーす」

同時に宿和と衛護は挨拶をし、手を合わせてテーブルに置かれた料理を食べ始める。

両手を前に突き出してしまったのがまずかったのか、

「ねえ、何で手袋してるの？」

と、至って普通の抑揚で宿和は衛護に聞いてくる。

「宿和さんと同じく、気に入ったから手袋を穿いているんですよ」

「ふーん。そう……」

咄嗟の嘘に宿和は特に気にした様子もなく、次々と料理を口に運んでいく。

腹が減ったときの宿和で良かったと、衛護は内心ほっとする。宿和は食べるのに夢中で、衛護の些細な変化を見抜けていなかった。

「そつえば、宿和さん。誰か尋ねてきましたか？」

「うっん、来てないよ」

「ならよかったです」

念のために衛護は、マンションから数メートル離れた場所に使い魔を放っていた。衛護の使い魔はツバメで、そのツバメにマンションを監視させるよう指示を送っていた。

異常が起きたときは、鳥の視覚を共有し、衛護に伝えてくれる仕組みだ。

マンション自体を強力な魔術結界で封鎖したかったのだが、そうすると他の魔術師たちに感づかれてしまう。

魔術師は魔術に敏感で、素人たちが発動する下位魔術程度の魔術

なら日常茶飯事だから見逃してくれる。だがマンション丸ごと結界の中に閉じ込めるという中位魔術になつてくるとそうはいかない。

衛護は彼らに気付かれないよう玄関だけに魔術結界を敷いていたのだ。

「宿和さん、僕と一緒に学校へ通いませんか？」

「……えっ？ 急に何を言ってるの？」

フォークを持っていた手がピタリと止まり、宿和はゆっくりと面を上げる。黄金色の目を大きく見開いて衛護を凝視していた。

「学校へ入学しましょう、と提案してるんです」

「嫌っ！ ……人が沢山いるところに行きたくない」

「反対されると解ってました」

「なら！ なら、どうして！」

「今日はたまたま襲われずに済みましたが、いつもとは限りません。僕が外に出ている間に宿和さんが危険な目に遭っていても、直ぐに助けることが出来ないんです」

「じゃあ、衛護と一緒にいるから！」

「余計に目立ちます。僕たちぐらいの年代の子は、学校へ通うのが当たり前です。制服を着た学生にまぎれるのが一番なんです。なのに浮浪者みたいに街中をうろちよろしてたら不審に思われます。ただでさえ貴方は容姿がいいんですから、人々の注目を集めてしまいます」

聞き分けのない子供をあやす母親のように、衛護は宿和に優しく諭す。

衛護とて宿和の気持ち解らないわけがない。衛護以外の人間を信用しておらず、通りがすりの人でさえ警戒心を強く懷いている。

学校ともなれば、人との関わり合いはもつと深くなる。宿和は人との関係を絶ちたいのに、衛護がそれを許さない。だから宿和は猛反発しているのだ。

そんな彼女を説得するのは一苦労する。でも衛護のことを思えば宿和は納得してくれるだろうと、甘い考えを持っていた。

「嫌嫌嫌嫌！ 私は狙われてるんだよ！ なのに、どうして！」

怒りを爆発する宿和。立ち上がり衛護を睨みつける。その瞳は黄金色ではなく、燃え盛る炎のように真っ赤。目の端から零れ落ちた涙は、頬を伝って床に落ちる。

そう、泣いていたのだ。

「私の中の、黄金釜（all of the world）を欲しがり同じ人間を殺す。そんな人間が、怖い。人間の欲望が。人間の目が。人という存在が怖くて怖くて仕方がないの！ 解ってよ、衛護……！」

「解ってます、貴方のことは誰よりも理解してます。だけど、僕は宿和さんを護らなければならない。この命に代えてでも。だから、宿和さんを死なせるわけにはいかないんです」

「そういう、衛護の態度嫌い！ だいつつつつ嫌い！ 自分の命を粗末にして、私を助けないで！ 偽善の優しさなんていらない！」
胸に秘めていた想いをありったけぶつけて、宿和は居間から出ようとする。

すかさず、衛護は彼女の手を掴む。

「何、よっ！ 離して！」

「聞いてください。確かに僕が言うことは偽善に聞こえるかもしれませんが。でも、貴方が心配だから、宿和さんが笑顔で笑ってくれるなら、それだけでいいんです」

宿和は握っていた手を強引に振り解き、衛護と向き合う。

瞳から流れる涙を衛護は人差し指の腹で拭ってあげた。

「わ、私は、衛護が死んでしまうと思うと、苦しくて、寂しくて、辛い……。衛護がどこか遠くへ行ってしまったら嫌なの！」

「僕も同じですよ、宿和さん。宿和さんが僕のことを想っているのと同じで、僕も宿和さんのことをいつも考えてます。互いに相手のことを思いやっているから、大事にしたいと思うのです」

そう言って、衛護は宿和の身体を引き寄せ、抱きしめる。

彼女は拒むこともなく受け入れて、衛護の腰に腕を回す。小さな

身体が不安のあまりか、震えていた。

「大丈夫です。僕は宿和さんから離れません。貴方を襲う恐怖から、僕が護つてあげます。そのために僕がいるんですから」

「……そ、それは、一族の命令……だから？」

「違いますよ、僕の本心です」

衛護には宿和を護れという一族からの命令がある。それだけは優先すべき重要な事柄なのだ。たとえ宿和に嘘を付いてでも。

「……うん、わかった。学校に行く……」

長い抱擁が終え、衛護は宿和をそつと放して、彼女の肩に両手を置いた。小さな身体はまだ小刻みに揺れている。

瞳から流れる最後の一滴を、すかさず衛護は拭き取ってあげた。

「学校へ行っても、クラスは同じにしますから、安心してください」

「……うん、わかった。って、あれ？」

「どうかしましたか？」

「コレ！ そうコレ何！ 思い出した！」

ぱしつと宿和の頬に触れていた手を掴み上げられる。握り締められる手は力強く、振り解けないほど。

もしかして、と内心の動揺を悟られぬよう衛護は至って冷静。

「腹が減ってて、そこまで気にしてなかったけど、そう！ どう見ても怪しいんだよね、この手袋……。外しなさい！」

「えっ……？ いや、ファッションですので……。それは聞き入れられないお願いです」

「私に逆らうっていうの？ このっ！ くぬぬぬ！」

すっぱんのように一度食らいついた衛護の手を彼女の手は絶対放さなかった。宿和の執念は並大抵のものではない。

衛護が腕を上げると、二の腕にぶら下がって必死の抵抗をしてみせる。

どんなことをしてでも宿和は衛護の手袋を引き剥がそうとする。その執着心に負け、最初に折れたのは衛護の方だった。

「わかりました。外します。外しますから、手を噛むのを止めてく

ださい」

「ふん、それでいいの。さっさと手を見せて」

衛護の手から口を放すと、宿和はそう言う。手袋にはくつきりと彼女の齒形が出来ていた。

逃げないようにするためか、衛護の腰に腕を回して抱きつく宿和。ゆっくりと手袋を脱がす。宿和だけには知られたくなかったが、それももう無理な話だ。

まずは、蒼い痣（sigma）のない左手が露になった。

「どうですか？」

「もう片方も」

と、低い声で言われたら渋々右手も見せるしかなかった。

衛護は覚悟を決めて手袋を剥いだ。新たに出来た痣を見た途端、衛護の腰に巻きつけていた腕に更に力を込める。

「……やっぱり。また魔術を発動したの？ まだ爪にしか蒼い痣（sigma）は顕れていないけど、これ以上魔術を使い続けたら、どんどん死に近づく。私を置いてかないでって言ったでしょ！ もう魔術は使わないで！」

「出来るだけ努力はします」

「そうか。だからそう言ってたのね。わかった。絶対に学校へ行く」
「急にどうしたんですか？」

腰から離れて、宿和は衛護の目前に立った。衛護の手を、彼女の温かい手が包み頬にすり寄せる。

「私が我がままだから、衛護に魔術を使わせてしまっただね。今日だって外に行きたくないって言ったから、私の安全を考えて魔術の使用をせざるを得なかった。違う？」

「……」

宿和は魔術の使いすぎで腹を立てているのではない。衛護が宿和のために魔術を使わせているのだと罪の意識があるから、罪悪感があるから止めて欲しいと訴えているのだ。

だから宿和は、自分の命と引き換えに護る衛護の態度を酷く嫌っ

ている。

「私、衛護のこと全然考えてなかった。それなのに、自分の意見ばっか言ってた。ごめん」

「宿和さんが気にする必要はありませんよ。僕自身が使いたいと思つて魔術を使つたまでですから」

「いいえ、私にも責任がある。うん、ちょっと怖いけど衛護が傍にいてくれるのなら、何倍の力にもなる。決めた、明日から学校へ入学する」

「積極的になってくれたのはありがたいことですが、すぐに、とはいきません」

「そう、なの……」

がつくりと肩を落として項垂れている宿和に、衛護は頭を撫でてあげた。

「明日、学校へ二人で行きましょう。もしかしたら、明日から通えるかもしれません」

「うん！ 一緒に行こう！」

満面の笑みを浮かべて頷く宿和。それを見た衛護も安心する。

まだ湯気を立てて残っているスパゲティーを衛護と宿和は片付けた。

「 ということなんです。僕たちは二人だけで暮らしてきました。せめて学校には通わせたくて」

「……ぐずつ。そうだったのか。今まで苦労してきただろうに……。いい、許可しようかのお！」

思い立ったら直ぐ行動。

衛護と宿和の二人は翌日の早朝から私立集星学校へ来ていた。

集星学校の生徒たちが興味深げに見てきても気にすることなく、衛護は正々堂々とした立ち振る舞い。

宿和はおっかなびっくりといった様子で衛護に引っ付いていた。昨日高々と学校へ行くと宣言したけれど、やはり人が怖いのだろう。校内に入り、近くにいた事務員にここに来た旨を伝えると、校長室に通された。中央のソファに座り、校長と対面。

そしてたった今校長から学校の入学許可をもらう。

総て衛護がでっち上げた偽の話だったが、どうして二学期という中途半端な時期に私立集星学校へ入学したいと申し出たのかわかってもらえたようだ。無表情で語る衛護が、鈴内校長には迫真の演技に見えたのだろう。

衛護の話を、校長先生は涙を流しながら聞いている。名を鈴内すずうちといい、年は六十を越え、十代目の校長。自己紹介のときにそう言っていた。

「制服は、明日用意するから平気じゃ。どうする？ 見学のために今日授業を受けてみるかのう？」

「じゃあ、言葉に甘えていいですかね？」

「うん、うん。そうするがいい」

校長はハンカチで涙を拭き取り、皺くちやの顔が笑顔に変わる。

念のために衛護は、隣に座っていた彼女に視線を向ける。先程から一言もしゃべらない宿和が心配で見ていると、ぶるぶると身体が異常に震えていた。

宿和の手にそつと触れると彼女は驚いたように震えたが、でも衛護の手を握り返す。

次第に震えが収まっていく。

「宿和さん、いいですか？」

「……」

無言で首肯するのが、彼女の精一杯の反応だったようだ。了承を得てほつと安心する。

宿和が積極的になってくれたのが何より衛護にとって喜ばしいことだった。ただ嬉しい気持ちは、決して貌には出ることはないけれど。「彼女は、学校が嫌いなのかのお？ 慣れればいいところじゃぞ？」

もし何かあれば、ワシに相談するがええ。……楽しい学校生活を送れるよう祈つのと看。」

「ありがとうございます、校長先生」

立ち上がり、衛護は鈴内校長に頭を下げた。宿和も慌てて立ち、礼をする。

「では、失礼致しました」

校長室から出て行くこうとする直前。

「辛いことがあったかもしれないけど、それは誰にでもあることじや。直ぐに打ち明けられないかもしれないが、打ち明けられるほど仲の良い友達を作るといふのも学校という場所じゃぞ？」

そう、小さな声で校長は呟いた。氣付いているかはどうかかわからないが、衛護には一言一句聞こえていた。

果たして彼は衛護たちの悲運を知っていたのか。校長が、でも家族のことを深く突っ込まなかったのは、彼が配慮してくれたからだろう。

衛護はもう一度深く一礼して、校長室から退場した。

「君たちか、新しい生徒は。話は総て聞いていたから大丈夫だ」

廊下に出たから直ぐに声を掛けられる。壁に腰掛けていた一人の女性が、衛護たちの前にやって来た。

窓から差し込む日差しがその人物の貌に当たる。

身長は以外にも高く、百七十センチある衛護と同じ目線。底の高い靴を履いているわけではない。齡は二十代後半だろうか、大人の女性が特有の色氣がある。

ぴしっと着たビジネススーツ姿で、黒のストッキングを穿いている。長い黒髪をポニーテールにして、切れ長の瞳が眼鏡の奥から衛護と宿和を見つめる。

悪いことは何一つしていないはずなのに隠し事がバレてしまったような、罪惡感に苛まれる。そのくらい強い強い眼光だった。

「はい、そうです」

「私についてこい。君たちを生徒たちに紹介する」

「あの、すいませんが貴方は？」

「私？ 私は君たちの担任の北村巳江だ、よろしく」

先に行く北村が急に立ち止まり、振り返る。ずっと、衛護にしなやかな腕を伸ばした。

どうやら、握手を求めているようだ。

拒むのは失礼だと思い、衛護は応じた。次に北村は宿和の前へ立ち、衛護と同じように握手を求めた。が、

「……ッ！」

衛護の後ろに彼女は隠れて、北村の握手を拒否する。

伸ばした手を引っ込めて、北村は何事もなかったように歩き始めた。

「ごめなんさい。宿和さんは、対人恐怖症なんです。気に悪くしたのなら謝ります」

「いや、気にしてない。そういう生徒を見てきたことがあるからなとつくに経験済みだ」

「そうですか。すいません……」

北村の背中に向かって小さく頭を下げる。

つんつんと横から脇腹を小突かれる。無表情を装っていたが、小さな機微で宿和が何を求めているのか察した。どうやら手を握って欲しいらしい。その期待に応え、衛護から彼女の手を奪った。

宿和にとって安心できる材料というのが、衛護から伝わってくる温もりなのだろう。

「……こほん。兄妹でイチャイチャするのは構わんが、教室に入ったら手を離れた方がいいと思うな」

北村は途中で立ち止まって振り返る。ポニーテールが大きく揺れ、眼鏡の奥から覗く瞳がぎろりと繋がれている手に向けられる。

やはり握手を断ったのを根に持っているのだろうか。

「あらかじめ言っておいてやるが、全識宿和が握手を拒否したこと
に腹を立てているわけではない。君たちの関係が変に誤解されない
よう注意したまでだ。入学初日からブラコン、シスコンだと思われ

たくないだろ？」

でも、怒っていることに変わりなかった。

「はい、思われたくはありません。でも、僕たちは兄妹ではないので平気です」

「ほほう。なら、君たちの関係はなんだというのだ？」

女性にしては長身の身体が衛護の前に迫る。その威圧感まるで、登山をしているときに運悪く熊に出逢ってしまったかのような危機感を与える。

「婚約者なんです。イチヤイチヤするのは駄目ですか？」

なんの悪気もなく、衛護は咄嗟の嘘を平然と言つてのける。本当のことは言えない。衛護は宿和の身体に宿している黄金釜を護るための護衛役などとは。

何故か貌をどんどん赤くしていく宿和。

今まで無表情を通していただけに、反応を示したことに北村は目を丸くしていた。こいつも人間の反応をするんだな、と言いたげに見る。

それが功を奏したのか、恋人同士だと北村は勘違いしてくれたようだ。

ふんと呆れたように北村は鼻を鳴らして、

「リア充を見せ付けるバカはいらいらするな、まったく。もってあと数年、いや、数ヶ月経ったら別れるのがオチだつて言うのに。まあバカに付ける薬はないつて言うしな。若気の至りだつていうのは解るが、もうちょつと人の目を気にしろよな。たくッ……」

ぶつぶつと文句を言い始める北村。恋愛絡みで昔何かあったのだろうか。

慰めの言葉を掛けてあげようかと衛護は思ったのだが、突然壁を蹴り始めた北村に呆氣に取られていた。

どうやらリア充を相当嫌っているようだ。

そんな彼女にリア充（だと思われる）である衛護が言える言葉などなく、かえって火に油を注ぐことになる。

「……あー、ここが君たちの教室だ」

ズレた眼鏡を北村は元の位置に戻し、扉の上の一年A組みと横に書かれた札を指差す。

「私がまず最初に中へ入る。その後君たちに入ってきて来いと命じるから、そしたら登場しろ。いいか？」

「わかりました」

「……」

無言のまま首を縦に小さく振る宿和。

それを了承の合図だと受け取った北村は、扉を開けて中に入っていく。

扉の向こうから生徒たちのざわつきが肌を通して伝わってくる。

新入生に過度な期待をするのは、定番中の定番だと学校の資料に書いてあったことを衛護は思い出した。

「大丈夫ですか？」

「心配しないで、平気だから」

北村が傍からいなくなり、宿和は本来の自分を曝け出した。無口、無表情を装っていても本当は怖いのだ。

口ではいくら強がっていても身体は小刻みに震えていた。

大勢の人が扉の向こうにいる。狭い場所に人が密集する教室は、彼女にとって恐怖以外の何者でもない。

「……というわけだ、『入ってきて来い』」

合図が聞こえ、衛護と宿和は共に入っていく。宿和はまた無感情に戻る。繋いでいた手は扉を開けるまで決して離さなかった。

衛護たちが教室に入った瞬間、騒がしさがピークに達する。

「あー、こいつらが」

「ねえねえ、あの男の人かっこよくない？」「うんうん。かなりタイプ！」

「うわっ！ やべっ！ なんだ、あの美少女」「というか、あの二人一体どういう関係なんだ？」

生徒の話し声が北村の言葉を打ち消す。生徒たちは衛護と宿和の

話題で持ちきり。特に宿和は女子からも男子からも注目を集めていた。

「あー、煩い黙れ。人が話してるときは静かにしろ」

どん、と教卓を思いっきり叩き、北村は教室全体を睨めつける。蛇にあつてしまった運の悪い蛙のように、生徒の言動が固まった。

これが蛇睨みというやつか。

「こいつらが新入生だ」

「よろしくお願いします」

「……」

生徒たちが興味津々な目で見てくる。いよいよ耐え切れなくなつた宿和は衛護の後ろに隠れて人の目から逃れる。それが逆に恥ずかしがり屋な性格だと思われ、生徒たちに好印象を与えた。

「んじゃ、自己紹介してくれ」

「僕は全識衛護といえます。どうぞ、よろしくお願いします」

「……」

「対人恐怖症で、人前に立つと緊張して上手くしゃべれないので僕から自己紹介したいと思います。彼女は僕の妹で全識宿和といいます」

そう衛護が言うと、クラスの男子が「うおおおおお！ 恋人じゃなかったのか！ チャンスあるんじゃない！」と歓喜の声を上げる。

女子は女子で「目の色を変えて、ホント男子って馬鹿ばっか」と、避難の声も上がったが「あの女の子リスみたいに可愛い！」と、絶賛する人もいた。

「ちっ、都合の悪いときは兄妹設定か。最近のガキは大人を完全に舐めてやがる。あー、うぜーうぜー」

怨嗟のごとき低い声で呟く北村。しまいには、教卓や壁を壊す勢いで蹴りまくる。その挙動を見た生徒らは、一瞬にして静けさを取り戻した。

「……あっ！ あの！」

「なんだ、薙末羅^{ちみら}？」

「彼とはちょっとした知り合いなんです」

身体を動かしたからか眼鏡の位置がズレており、露になった瞳が忌ま忌ましげに薙末羅という人物へ向けられる。

衛護も北村と同じように見れば、茶髪の女子が一番後ろの席で立っていた。

「あつ……」

思わず声に出してしまった。貌は依然として無表情だが、反応を失ってしまったのが運のつき。

掛け直した眼鏡越しから、北村が問いたげな眼差しで見つめてくる。

「ほほう。薙末羅にも手を出したか、隣にはい・も・う・とというものがいながら……なあ、全識衛護？」

「いいえ、違いますよ。くくりさんとはそういう仲じゃ……」

「くくり、だと？ いきなり下の名前で呼び合うなんて、よく簡単に打ち解けられたもんだな？」

「くくり、と倉君が呼んでいたんで知っただけですよ。本名は知りません」

北村に詰め寄られても衛護は微動だにせず。

恋愛事に関して躍起になる彼女は、大きな失恋を昔したのだろう。でなければここまで衛護たちの人間関係に必死になるわけがない。

「倉？ ああ、久々^く（ぐ）津倉^つのことか。そうなのか、久々津？」

次の獲物^{ターゲット}を倉に移して、切れ長な目が倉を射抜く。

最初は無視を決め込んでいた倉だったが、北村の視線に含む殺気にあてられたら、黙っていられるはずもない。

「……くつ、そうです。あいつの言ってることは合ってますよ。た、なんで俺に振るかな」

座っていても目立つ金髪頭に、ファッションなのか頭上にサングラスを置いているチャラ男。倉は嫌悪を貌に貼り付せて、北村の質問に答える。

「それと！ 言っておくが全識衛護、くくりを下の名前で呼んでいいとは許可してねーからな！」

「なっ！ なんて倉が勝手に決めてんのよ！」

怒りを声の節々に滲ませながら、くくりは倉に向かって指さす。指摘を受けて倉は慚然としていた。どうして俺が怒られなきゃならないんだよ？ と言いたげな貌で、衛護たちを睨む。

「あー、うぜーうぜー。青春真っ只中かよ、くそがッ！ 見せ付けるなよ、こっちは目に毒なんだから、たくッ！」

殺意を宿した瞳で衛護を見る。

注意されるのが衛護だけだったのは納得がいかない。でも反論すれば、蹴りを一発お見舞いされてもおかしくはない威圧感を放っていたので、仕方なく口を噤んだ。

「んじゃ、全識兄妹、お前らの席は……丁度いい。一番後ろの席に座っている薙末羅と久々津の近くにしよう。面白そうだから衛護は薙末羅の右横、宿和は久々津と薙末羅の間だな。……異論は無論ありはしないよな？」

片側の口元を吊り上げた底意地の悪い笑顔で、北村は圧力を掛ける。

……あの、面白そうだからという本音が出てましたけど。と、言えるはずもない。

ここで抵抗すれば後で教員室へ連行され、調教されることだろう。「自己紹介も終わったことだし、仲良くしてやってくれ。んじゃ、授業を始めたいと思う」

北村が強引に締め括りした直後、チャイムの音が鳴る。

慌しかった一日にやっと区切りが付いたのだった。

授業は一通り学び終えていたので比較的楽であり、復習の機会だと思えば苦にはならなかった。

ところが衛護と違い宿和は勉強が苦手で、全部教わったはずなのに他の生徒と同様黒板と睨めっこしていた。

休み時間になれば、授業とは違った大変さ。授業が終わった途端に、人だかりが主に衛護と宿和の周りに出来き、質問攻めにあう。

宿和が恐怖に怯えていた。急いで彼女の元へ向かい、彼らに事情を話すと、「ああーなるほど、だからか」と納得するや否や、今度は衛護の許に生徒の群れが集う。

あらゆる質問に嘘と真実を織り混ぜて頭をフル回転で使っていたからだろう、修練で鍛えたはずの肉体も、精神も参っていた。

それが一度ならず休み時間が来るたびに対応に追われていたのだから、放課後を迎える頃には草臥れていた。

「だいじょうぶー？ 全識君」

「んん……大丈夫です」

声を掛けられ、衛護は机にへばりついていた貌を上げる。

そこには宿和ではなく、くくりの姿。茶髪が夕日の色に染め上がっていた。

「あれ、みなさんは？ それに宿和さんはどこにいったか知ってますか？」

「全識さんなら後ろ。もう放課後だからみんな解散してるよ。色々とお疲れ様」

顎でくくりは衛護の背後を指し、振り返ってみると宿和の姿を発見する。無言で佇む彼女は、まるで本当の仏蘭西人形のようなだった。ほうつと安堵の溜息をつき、再びくりに視線を戻す。

「すいません、僕たちは帰ります。宿和さんを見ていてくれてありがとうございます」

「あ、いや、あの！ これからどう？」

立ち上がり帰ろうとする衛護に慌てた様子で話を続けようとするくくり。

「どうって……何がですか？」

「察しが悪いな、全識衛護。このあと時間が空いているのなら、暇を潰さないか？ とくくりが訊いているんだ。そう、くくりがな」

男の声が衛護とくくりの会話に割って入る。その男は窓際に突っ

立っていて、サングラス越しから衛護を見つめる。金髪が時々窓から入り込む風に煽られて揺れていた。

「そんな嫌味に聞こえるようなこと言わない！ 倉が、意地が悪い子に見られちゃうよ？」

「別にいいさ、俺はそういう風にクラスのみんなから思われてるんだから。周知の事実じゃないか」

「なんで、倉はいつもそうなの！ 可愛げのない子！」

「……くくりがいてくれさえすればいいんだよ……他の人間なんて要らない……面倒なんだ……人間関係が……」

小さな声で呟く倉は、サングラスを掛けていてもわかるほどの夢げな貌をしていた。その言葉は誰の耳にも届くことはなかったが、衛護だけは彼の秘めたる思いを感じ取った。

オレンジ色の教室に深い沈黙が訪れる。静寂を破ったのは衛護だった。

「どうですか宿和さん、一緒に行きませんか？ 彼らは優しい人たちです。僕が保証します。一度でいいですから、僕以外の人間を信じてみたらどうですか？」

びくりとも動かない宿和の貌を見て語りかける。

わかつてはいた。衛護がどんなに説得してみても人間そのものを忌み嫌う彼女が、うんと、応じるはずはない、と。

集星学校に来たことですら大きな進歩であり凄いことなのに、これに人との付き合いを付加したら、宿和は絶対に首を縦に振らない。

再び沈黙が教室を支配した。

宿和の貌からほんの僅かな機微を察知する。

「……そうですか、わかりました。すいません、倉君、くくりさん誘ってくれてありがとうございます。今回は遠慮させていただきます」

「いえいえ、こちらこそ無理言ってごめんね。なんか気を使わせちゃったみたい」

笑顔で話すくくりだったが、肩を少し落として残念そうにしてい

た。

こればかりは衛護が出来ることなど何もなかった。宿和を強引に連れて行くというものの気が引ける。嫌がつている彼女を連れていけば、くくりたちに気を遣わせてしまふだろう。

親切で誘ってくれた彼女たちに、その親切を踏みにじる行為はしたくなかった。

「また、誘ってください。それでは今日は失礼します。また明日」
無言で立っている宿和の手を取り、衛護は教室をあとにする。

下校途中でくくりと別れて家へ帰ってきた倉は、だだっ広い屋敷を迷うことなく進み、とある部屋の前へとやって来ていた。

コンコンコンと高級な木造のドアを、倉はいつも通りに叩く。扉が開かれる合図はノックを三度。それ以外では中の住人は決して開けない。

「入れ」

扉の向こうから、低い声がする。腹の底から震え上がらせる声色。いつ聞いても慣れることはなかった。

ここに訪れるたびに、倉は緊張で手に汗を握っている。本当は彼の部屋になど入りたくはなかった。でもそんなことを許す彼ではない。

逆らうことを絶対に許さない、人を権力で屈服させる人物。彼は集星市を牛耳っており、政治の世界に深く係わり合いを持っている。久々津家の現当主にして、今も現役の一代目の魔術師。そして、久々津倉の父親であり魔術師の師でもある。

久々津遜業には願望ねがいがあつた。

権力があるとはいえ、叶えられる夢とそうでないのものとがある。遜業の叶えたかつた願望ねがいは、人類の頂点に立つという子供が考えそうな幼稚なもの。

それを本気で成し遂げようとしているのが遜業という男だ。

彼の力だったらこの国を簡単に治められるだろう。でもそれが限界。彼の野望は人間が行える限度を超していた。

だから遜業は、非現実的手段で手に入れようとしたのだ。

魔術。

権力で総てを解決してきた彼が超越的なものに縋るのは、権力だけでは叶えられない夢だとわかってしまったからだろう。

自分の我欲を押し通す久々津遜業が、願望^{ねがい}を諦めるはずもなく、どうやったら叶えられるか思考を凝らした先が魔術だった。

「失礼します」

一度深呼吸をし、ゆっくりとドアを開けて中に入った。

「報告をしろ。速やかに」

部屋は豪華な造りになっており、様々な種類の調度品が壁に飾ってあった。

どこの国のものかはわからないが、金粉が所々塗してある青色の壺や、精巧に作られた家具や道具、色や形の違う武具や防具の他に、古代から現代に到るまでの兜や鎧、更には大きさの全く違う仮面などが部屋中を埋め尽くしていた。

久々津遜業は広いデスクに肘を突き、顎に手を乗せて座っている。脚が沈むぐらい柔らかかなカーペットを歩きデスクの前に来ると、倉をじろりと睨めつける。気を付けの姿勢で立ち止まった。

遜業は普通の眼鏡と違いレンズがひとだけの片眼鏡を掛けている。長い髪は後ろで一房に纏め、まだ五十代だというのに髪は完全に白髪だった。

「はい。今日は、いつもと変わらず……、いや……」

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

「何か変わったことがあったら言うようにと、黙ってあったはずだが？」

「はい、わかりました」

父である遜業に、一日の出来事を仔細に伝えるのが毎日の日課。学校での詳細を総て伝え終わると、元々鋭かった目付きが眼光だけで人を殺せるほどの鋭利なものに変わる。

「何……？ 全識だと？」

「はい、そうです。二人とも転校生で、兄の全識衛護は洋服店で見かけましたと、以前お父上様に伝えました。ただしそのときは名前がわかりませんでしたので、男と表現しましたが」

「クククッ！ フハハハハ！ そうか、天はわたくしに味方してくれたのか」

突然、口元を厭らしく歪めて笑う親の姿に、倉は不気味さよりも驚きを隠せなかった。彼があんな風に声を上げて笑ったところなど見たことがなかったからだ。

興味を惹かれ、疑問を口にしてみる。

「何かいいことでもありましたか？」

「お前が知る必要はない。もう用はない、立ち去れ」

「はい、わかりました」

「いや……アイツに全識家のことを話しておいたほうが、今後いいかもしれぬ。監視するにあたって理解をし易くするために、な……」

おい、俟て、お前」

帰ろうとする倉を、遜業が呼び止める。何の疑問も持たずに振り返り、「はい、なんでしようか」

「こっちに来い。まだ話は終わっていない」

「わかりました」

言われたとおりに遜業の前に来る。居住まいを正し、彼の話を聞く。

「お前に言っておくことがある」

「なんでしようか？」

ニヤける口元を隠そうともせず、遜業は話し出す。

全識家は歴史の長い魔術師の家系で、上位に入るぐらい有名な魔術師の一族。彼らはとある存在に立ち向かうべく魔術を探究してい

た。それが、？運命さだめ？の存在。

運命さだめがある限り、たとえどんな生物だろうが逆らえない。人間は運命さだめが敷いたレールを歩いているだけの、人形に成り下がっている。その呪縛から解放されるには、魔術の力を以てして他にない。

そこで全識家は運命さだめに抗うべく黄金釜き（all of the world）を造り上げたのだ。

「わたくしが欲しいのは黄金釜き（all of the world）だ。総てが極秘だから、どんな姿形をしているか知らぬ。ただ全識家が持っていることだけはわかつている」

「その、黄金釜き（all of the world）というモノをお父上様は欲しているのですか？」

「ああ、そうだ。しかも全識一族は何者かによって滅ぼされたと報告が入っている。つい最近の話だ。ところが、生き残りがいるというではないか。クククッ」

「それが全識衛護と、全識宿和ですか……。あの、お父上様。お差支えなければ訊きたいのですが」

「なんだ……？」

先程まで笑顔だった遜業が、表情を崩し厳格なものへと変える。鋭い眼光が、ぎよろりと倉に向けられた。息子を見る目ではない。赤の他人の子供を躰けるようだった。

倉は、でも好奇心が勝り、遜業に一発殴られる覚悟で質問する。

「黄金釜き（all of the world）とは、一体どういったモノなんでしょう？」

全識という言葉に過剰反応し、そして今まで見せなかった父親の笑顔。ただ事ではないに違いなかった。

黄金釜き（all of the world）を求める理由が知りたいのは当たり前である。

「いいだろう、特別に教えてやる。黄金釜き（all of the world）とは、全識家の魔術師が愚かにも自分の命と引き換えに膨大な量の魔力を注ぎこんだ釜のことだ。その釜を使えば奇蹟

を簡単に起こせる。わたくしの願望^{ねがい}を成就させるために、黄金釜（all of the world）が必要なんだ」

なるほど、遜業が喉から手が出るほど欲っているのも頷ける。黄金釜（all of the world）とやらがあれば、人類の頂点だけでなく、ありとあらゆる霊長類の頂点にさえも立てるだろう。

但し彼の夢は、得てしてやっと叶う夢である。だから、

「言いたいことは判るよな？ わたくしは政治で忙しい。だからわたくしに代わってお前が全識兄妹を監視する。わたくしのような年老いた者が傍に寄ったら不審がられるからな。お前が仲良くなつて彼らの情報を手に入れるのだ。まだソイツらが全識家の生き残りだとは決まってるからな。とりあえず、様子見だ。何かまた変わったことがあつたら伝える。以上だ。出て行け」

「……わかりました。失礼しました」

行儀良く一礼し、倉は遜業の部屋をあとにした。

「どうして……こうなった……」

段々と自分がしでかした過ちを思い知ることになった。

罪悪感、緊張、恐怖がごちゃ混ぜになり、久々津倉はベッドにうつ伏せ、悶々と時間を潰す。

頭に掛けていたサングラスを取り外し、ベッドの横の台に置く。

長い髪をかき上げて、消化のしきれない思いを言葉に出していた。

「どうして。どうして俺はあのか、父親に転校生の話を持ち出した。なんで彼らのことを話したりしたんだ。何の罪もない人間を、父親の悪事に巻き込ませてしまったんだぞ……ッ！ バカか、俺は！」

やり場のない後悔の念を、握りこぶしを作ってベッドに叩きつける。ばふつと虚しい音が響くだけで、後悔は消え去らなかつた。

「いくら全識衛護が憎くたって、やっていいことと悪いことはあつたはずだ！ なのにどうして歯止めを利かせなかつた！ 父の手に

かかったらあいつらは死んでしまう。そうなったら全部俺の責任だ。そんなことを宿和に知られたら、彼女は……ッ！ 彼女はきっと俺を嫌いになってしまう」

もう一度ベッドを殴りつける。

何か気に食わないことがあったから、倉は父に話した。一体何が……。

転校生がちやほやされていたからか？ いや違う。

じゃあ、北村先生の標的にされたからか？ それも違う。

自分で言っていたじゃないか、憎かったって。 何が憎かったんだ？

「ああ、もしかして俺はイラついていたのか、あいつに」

くくりと仲良くしていた全識衛護が不快でしかたがなかったのだ。何故、ここまでむしゃくしゃするのか自分でさえも倉はわからなかった。獣のような荒々しい感情が心に住み着き、倉を苛んでいた。「失礼致します。ってあれ？ 倉様、いないのでしょうか？」

真っ暗闇な室内に明かりが燈る。

いきなりの光源が目染み入り、倉は両腕で塞いだ。

「あつ！ すいません、たびたびの失礼をお許してください」

「いや、大丈夫だ。いることを伝えなかった俺の方が悪い。奈々（なな）が悪いわけじゃない」

ベッドから起き上がり、淵に腰を下ろす。サングラスを掛けて、声のした方向を見るとそこには、メイド服を着た女の子。

咲璃奈々はカチューシャを頭に付け、エプロンをしていた。

彼女は喫茶店のメイドとは違う、本格的なメイドだ。久々津家のメイドとして迎えられたのは、倉がまだ六歳の頃。当時の奈々も倉と同じ年の六歳。その頃から久々津家の厳しい躾を受け、彼女は心身ともに忠実な女中として育てられた。

そして、彼女は努力に努力を重ね、倉の専属メイドとして今に到

る。

ぺこぺこと何度も頭を下げる姿が可愛らしかった。先程の悶々とした感情が、彼女を見ればほぐされていく。

「逆にお礼を言いたいぐらいだ。ありがとう……」

「いえいえ、じゃなくて……ど、どうかしたんですか、倉様」

「いや、なんでもない。こっちの話だ」

笑顔を向けると、頬を赤く染める奈々。季節のようになんか変わる彼女の貌が可笑しくて、倉は声に出して笑う。

「ど、どうしたんですか、急に！」

「謝ったり貌を赤くしたり怒ったり、忙しないなと思ってさ。それが堪らなく面白くて」

「すいません……」

「別に責めてるわけじゃない。謝らなくいいよ。むしろ、それがチャームポイントだからいいんだ」

そう倉が言うと、悲しげな表情だったのが、ぱっと花が咲いたように奈々は微笑を讃える。

……女の子は感情豊か。見ていて飽きない。秘かに倉はそう思っていた。

「ごほん！ えつとですね、ここに来たのには理由がちゃんとあるんです」

「なんだ？」

「ご飯、食べてないですよ！ 倉様だけですよ、手をつけてないのは。あとのみなさんは全員召し上がりになりました。ですから、倉様も！」

奈々が運んできたのだらう、トレイを部屋の真ん中まで押す。

トレイの上にある料理の品々を持ち、テーブルの上に並べていく湯気が立っていた。もしかしたら、奈々が倉のために作り直したのかもしれない。

心遣いはとても嬉しかったが、今は食欲がない。

「ごめん、いらない。下げてくれ」

「駄目です！ 体調が優れないときこそ食べたほうがいいんです！」
「そんな、気分じゃないんだ……」

ベッドの上で頂垂れている倉の許へ奈々はいそいそとやってくる。隣に腰掛けると、ベッドが彼女の重みで軋む。

本当は一人にして欲しかったのだが、出て行け、と奈々に強く言えるわけがなかった。

「一体どうしたのですか？ 悩み事なら聞いてあげますよ？」

「大したことじゃない。だから気にしなくていいよ」

「言ってください。……じゃないと、あれ、片付けられませんから」
奈々が指したのは、料理の数々。目を閉じて笑う彼女がとても怖い。どうしても食べて欲しいらしい。けれど、一向に腹の虫は鳴る気配がない。

不意に手を奪われる。倉の手を、彼女の両手が優しく包み込む。柔らかい手から伝わる温もりは、暖かくて気持ちよかった。

どんなときも奈々は倉を励まし、悩みに真剣に耳を傾け、過ちを犯しときは厳しく叱咤してくれた。それはメイドというよりは、幼馴染みのような関係。むしろ幼馴染みだと、倉は思っている。

呼べばいつだって直ぐに彼女は駆けつけてくれた。

奈々の温もりに何度助けられたことが。

でも、甘え続けていたくはなかった。このまま甘えていたら、きっと自分が駄目になる。

迷惑はかけ続けられない。倉だってもう高校生なのだ。大人にならないければならない年頃。人を頼ることは止めて自立したい思いがあった。

「黙っていてもわかりませんよ？」

「だから、なんでもないって。気にするな」

そう倉は言って、彼女の手を振り解いた。ベッドに横になろうかとも思ったが、奈々がいるため断念。仕方なく部屋の中央に向かい、テーブルの椅子に腰掛けた。

テーブルの上の料理をぼーっと眺めていると、声を掛けられる。

「倉様がどう思ってるかは知りませんが、私は心底心配してるんですよ?」

「奈々がそこまで気にする必要はないだろ」

「だって……。私は……」

「私は?」

「私は、貴方様のメイドです。あるじの体調管理が私の役目。もし倉様が病気にでもなっていたら、総て私の責任になります。ですから、倉様がご飯を食べない理由を知らなければなりません」

奈々の力強い瞳に見つめられ、倉は言おうかと迷い始める。

先程までの決意は崩れ始め、彼女に悩みごとを打ち明けたくなっていた。でも、と倉は踏ん張る。ここで揺らいだら負けだ。

どこかで踏ん切りをつけなければ、この先ずっと倉は奈々を頼りとした生活を送ってしまう。そうなるのは勘弁。彼女も倉と永遠に一緒なのは嫌だろう。決別しなければならぬ日が来る前に備えておく必要があった。

「もしかして、くくり様と何か関係がありますか?」

「……ッ!」

奈々とくくりは面識が一切ない。なのに奈々が知っているのは、倉が彼女にくくりの話をしたことがあったからだ。

何故くくりが関係しているとわかったのだろうか。図星を指されて、室内はエアコンが効いて涼しいはずなのに、額からは大量の汗が吹き出していた。

「その反応は、当たってますね?」

「違う……。いや、そうだ。どうしてわかった……」

弁解しようとしたが、それが虚しい抵抗だとわかり止める。

「倉様のことですもの、絶対にくくり様の話だろうとわかってしまいました」

「そうか、そんなに判りやすいのか、俺は」

「はい。くくり様が大好きですものね、倉様は……」

『くくりが大好き』という言葉聞いただけで、貌がかつと熱くな

る。動揺のしすぎで、浮き出る汗は止まる気配がなかった。

何を言ってるんだ！ と、なけなしの意地を張って反論しようとする。けれど、奈々の表情を見てしまったら、声に出せるはずもない。

唇を強く噛み眉根を寄せた表情は、苦しんでいるようだった。

「……いつもそうでした。倉様がお話されるのは、くくり様のことだけです」

「そんなことはないだろ。てか、好きなわけがねえ」

否定するが奈々は首を横にぶんぶん振って、そんなことはない、と言っ。

「……ッ！ 奈々なんかにわかるわけがないだろ、俺の気持ちなんて！」

精一杯の虚勢を張って、声を張り上げる。自分でも情けないとは思っていても、そうせずにはいらなかった。

倉の気持ちをわかるはずがない。ましてや、赤の他人の奈々が、いくら長年付き添ってきた彼女だからといって、倉のこと全部を知り尽くしているはずはないのだ。

「分かりますよ！ 倉様がくくり様の話をするときは、いつも笑顔でした。楽しそうにくくり様のことを聞かせてくれるじゃないですか！ それは、好きだからですよ。なんで気付かないんですか、自分の想いを……」

「だって、それは……ッ！ あいつが、面白いやつだから……だ。これ以外に理由はない！」

「話の種にもならない人だっているんですよ！！」

初めて見る奈々の怒って泣いている貌。今まで溜まっていた内なるものを、総て出し切ったようだった。

ポツポツと流した涙が真っ白いシートに滲みを作っていく。両手で涙を拭うが、次々と瞳から大きい粒があふれ出てくる。

「ごめんなさい、大声だして……」

「あ、いや。俺も悪かった。そう……だよな。奈々の言うとおりだ。話題にも上がらない人間は、要するに興味すらないって奴ってことだもんな」

倉は自分のクラスメイトのみんなから恐れられている。政界の有力者の息子に自分から仲良くなりたいたいと思う輩はいない。彼に危害を蒙ったら、その危害を加えた人物の家族全員は殺される、と生徒たちの間で噂になっているからだ。

事实は嘘であり、たとえ倉が遜業に厭なことをされたと告げても相手にはされないだろう。彼が全権力を持っているため、本当に殺害しようと思えば簡単にやってのけるは確かだ。更には魔術師の家系ときた。当然、関わり合いすら持ちたくなくなるのが普通。

だから倉から仲良くしようと思ったことはない。彼らは倉にしてみれば、空気も同然の扱い。自分から拘っても得になることもないし、むしろ損である。だったら一匹狼でいるしか他にない。

でも、そんな倉に優しくしてくれる子がいた。

それが薙未羅くくりだったのだ。

「だからって、何故奈々が怒る？」

「倉様がズルイからです。そうやって気もないのに私に優しくするからです！」

……俺は奈々に優しくしていたか？ 今だって奈々を悲しませて、しかも泣かせる原因すらもわからないままである。そんなやつが絶対に優しいはずがない。

ますます奈々の言いたいことが見えてこない。彼女がどうしてここまで感情を露にするのか。やはり奈々本人の口から言われないと自分のことすらも知らないのか。

「優しいか？ 迷惑ばかりかけて大変な目に遭っているじゃないのか？」

「いいえ。倉様はメイドである私とこうして話してくれます。そ

れは優しい人だからです」

「普通だろ、話すのは……」

そう倉は言くと、首をゆっくりと横に振って奈々は否定する。

彼女は目を赤く晴らしながら、無理やり笑顔を作り出していた。「女中とは本来あるじの下で働く奴隷。あるじの言うとおりに動く機械のようなものなのです。ですから、機械に話しかける人間などいません。そういうものなんです。なのに倉様は、なんの気兼ねもなく私とお話してくださいました」

「俺と奈々は、幼馴染みたいなものだろ？ メイドだからとか、身分が低いからって無視するわけないだろ」

「幼馴染み……ですか。やっぱり幼馴染みでしかないんですね……」

小声で奈々が言うので、何を言ったのか聞き取れなかった。

ベッドをぎゅっと掴み、彼女は悲しげな表情をする。

どうやらまた奈々に酷いことをしてしまったようだ。こんな奴が本当に優しい人間なのだろうか。

「それで！ くくり様とどうかされたんですか？ 相談に乗ってあげます」

声を張り上げて、奈々は話を強引に戻した。

倉の悩みを聞くまでは帰らないつもりでいるらしい。

奈々の優しさに感謝し、倉は口を開く。

「俺一人で解決できないほど事態が発展してしまったんだ……」

「つまり、どういうことですか？」

「俺は、罪のない人間を巻き込んでしまった。お父上様の悪事に、俺は加担したんだ。どうしてそんなことをしたのか、今やっとわかったよ。奈々のお陰で……」

くくりが衛護と仲良くしているところを見ると、抑えられない怒りが沸騰してしまう。

倉の人生の中で初めての経験だった。

くくりが誰と親しくしているようともなかったのに、何故か衛護と楽しそうに会話しているのを見ると、胸の奥がイガイガして

気色悪い。

この感情が嫉妬だと気付いたのは、奈々が倉はくくりのことを好きだと指摘してくれたお陰である。

自分でさえも分からなかったくくりに対する気持ち、彼女は的確に当ててくれたのだ。

「自分がしでかした過ちを、くくり様が知ったら嫌われると思ったのですね？」

「……ッ！ うん、奈々の言うとおり。何でもお見通しなんだな」「好きな人から嫌われたくないです。誰でもそうです。だから、倉様があんなにも苦悩していたのですね」

奈々に諭されて倉はただただうん、と頷くしかなかった。彼女に相談してよかったと、倉は思う。一人では抱えきれない悩みだったが、誰かに打ち明けたことで、すーっと心身共に軽くなったような気がした。

「もう、後戻りできないんだ。どうしたらいい……」

ベッドから離れ、倉の座っている席へ奈々は来て肩に手を乗せた。その手の温もりに安堵しながら、倉はふーっと深い息を吐く。

これから起こるであろう悲惨な事態に、今から倉は悵鬱な気分になる。

「落胆しても仕方がないです。過ぎ去った過去はどうやっても変えられません。ただ、これから先は別ですよ、倉様」

彼女の声が沈みゆく倉の気分を安らかにしてくれる。奈々がいるから、倉はどん底にならずに済んでいるのだ。

「まずは、くくり様に第一に伝えるんです。自分がしでかした間違いと、そして、自分の気持ちを」

「そんなことしたら、俺は嫌われてしまう」

「恐れてどうするんですか！ 彼女は大切な人なんでしょう？」

「うん……」

「だったら！ 嘘を付き続けたままでいいんですかッ！ 好きな人まで騙すつもりなんですか……？」

肩に置いてある手の力が強くなる。皺ができるほど服をぎゅっと握り締める奈々。

彼女は怒ってくれているのだ、倉のために。倉を心配してくれるから、こんなにも感情を露にするのだ。

肩に置かれた奈々の手を、倉の手が優しく包む。

「嘘も、騙すつもりもない。もし俺がくぐりにそういうことされたら嫌だ。自分でされていやなことはしない。だから言うよ、奈々」

倉は振り返り、真っ直ぐ奈々の瞳を見つめる。己の本気が解るように。こんな駄目駄目な自分に彼女は、柔和な笑みを浮かべる。それを見ただけで不思議と勇気が湧いてくる。

「くぐり様なら絶対、許してくれます。その代わり、たつぷりと叱られることになると思いますが、覚悟しておいてください」

「ああ、そうだな。うん、一発殴られる覚悟でいる。いや、むしろ殴ってもらいたいぐらいだ。こんなしょうもない奴の目を覚ましてもらいたい」

くすくすと声を上げて笑う奈々を、不審げに見る。

「どうかしたか？」

「くすつ。いえ、お冗談を言える、いつもの倉様に戻ってくれてよかったと思ひまして」

「これも奈々のお陰だ。ありがとう」

「どういたしまして。でも、感謝するのはまだ早いです。総てが丸く収まらなければ意味がありません。くぐり様のことは一応解決しました。けれど、罪のない人たちはどうするつもりですか？」

意識がくぐりに向いていたため、肝心なことを忘れていた。一番の問題は彼らだ。全識衛護と全識宿和。厄介なのは、遜業が彼らに狙いを定めたことだ。彼は自分の願望が叶えられるならば、衛護と宿和を殺すことになるの躊躇いも持たないだろう。

むしろ殺してでも自分の野望を成し遂げようとするはずだ。今は、彼らが全識家の生き残りだと解らないから手出しはしないが、それも時間の問題。

彼らが全識家の生存者だと知れたら、命はないものと思ってい。自らの権力を使って警察の力を頼りにするかもしれない。そうなる前に、総てを解決しなければならなかった。

抱えている問題は多すぎて、でも、やらなければいけないくて。

そんな心の葛藤を見透かしたのか、あるいは貌に出ていたのか、奈々は微笑みかける。

「大丈夫です、そこまで深刻になる必要はないです。心配は要りませんよ」

「そう言い切れればいいんだけどな。今回の場合、お父上様が関与している。簡単にことが運ばない」

「でも」

「奈々の言いたいことは判ってる。だから平気だ、約束は守る。俺は男だ。一度言ったことは取り消さない。くぐりに俺の本当の気持ち伝えるよ。そして、全識衛護と全識宿和を助ける。絶対に……！」

倉は声を張って奈々の言葉を遮った。嬉しそうにへらっと笑う彼女に、

「どうかしたか？」

「いえ、倉様がやる気になってくれて喜ばしかったので」

彼女はメイド以上の存在だ。幼馴染みという枠組みから外れている。

倉が七歳の頃に病気で亡くなってしまった久々津節　母上の面

影と、奈々が重なる。

今もまだ節との思い出を覚えている。

遜業に叱られて泣いてしまったとき、母の許に行って慰めてもらっていた。柔らかい母上の掌が倉の頭を優しく撫でってくれるだけで、倉を元気にさせる力があつた。

節は喪つてはならない人間だった。けれど、もういない遠い過去の人。

でも、今は母の代わりに傍に奈々がいる。

そう、奈々は母親と同じ匂いがしたのだ。彼女の体臭を指しているのではない。同じような雰囲気を身に纏っているのだ。だから母親みたいだと倉は思ったのかもしれない。

「なんかお腹が減ってきた。やる気が出てきたからか。手間かけてすまないが、もう一度料理を温め直してくれると助かる」

「はい、わかりました」

胸の前に両手を添えて静かに礼をすると、テーブルの上に置かれていた料理の品々をトレイへ持っていく。

もう一度倉に向かって丁寧にお辞儀すると、トレイを押して部屋から出て行った。

太陽の光で目を覚ますと、衛護はむくりと起き上がり、両腕を天井に向かって伸ばした。

貌を横に向けて台の上の時計を見る。時刻は六時を少し回っていた。今日は日曜日だから慌てる必要はない。

「学校が始まったら、この時間帯に目覚ましをセットしておく必要がありますね……」

無事、次の日になる。一族を襲った犯人からの追撃は以後皆無。

昨日くりたちと別れてから、宿和は一度たりとも衛護と話さなかった。人がいなければ口数の多い彼女だが、家の中にいても無口のまま。理由を問い質しても無言を貫き通す。一体何があったのか解らない。まま朝を迎えてしまったのだ。

その当の本人は、すーぴーと可愛らしい寝息を立てて、衛護の隣でぐっすり寝ている。

狭いベッドに二人で寝るのは、やはり無理があり、衛護は一睡もできなかった。幾度となく宿和と一緒に寝たことがあるため、女子と寝るのは何とも思わない。むしろ、一緒に寝ないと落ち着かない。襲撃者から安全を護るためには、近くにいないかならないか

らだ。

朝日が窓の向こうから差し込み、宿和のきめ細やかな肌を浮き彫りにする。光りに透かした銀髪は、ベッドのシーツの色までをも鮮明に映すほど色素が薄い。

髪を撫でると、瞼がゆっくりと開かれる。黄金色の大きな瞳が、衛護を見据えた。

「う……んっ……。もう朝？」

「はい、そうです。大丈夫ですか？」

「……」

声には出さなかったが、首を縦に振る。どうやらまだ本調子ではないらしい。

パジャマの裾で目をこしこし擦って、彼女はベッドから這いずり出た。昨夜からずっと握り締められていた手をやっと宿和は離す。手が少し赤くなっていた。

「ご飯食べますか？」

「うん、食べる」

短く告げられた言葉を聞き取り、衛護はまた宿和の髪を梳いてやる。まるで猫のように目を細めて彼女は気持ちよさそうにする。

機嫌が直ってきたのか、少しずつ話すようにはなってきた。

それを良しとし、衛護は寝室から出て居間に向かう。

台所へ着くと、直ちに料理の準備に取り掛かった。

手際よく材料を切ったり、焼いたり、茹でたりしてあっという間に冷やし中華の出来上がり。

プラスチックの皿に盛り付けて居間に急いで持っていくと、正座して待っていた可愛らしい宿和の姿が。食欲だけは相変わらずあるようだ。食欲がないと言われたら、心配になるところだったけれど、テーブルの上に皿を置くと今にも手でがつつきそうだったので、衛護は慌てて台所に戻り、割り箸を持ってくる。

宿和に渡した瞬間、いただきますも言わずに割り箸を二つに割って食い始める。

「そんなに焦らなくても料理は逃げませんよ？」

「いいの！ お腹減ったんだから！」

麵を何本も箸で掬い上げて、ごくりと食べる、というよりは飲み込む。

あつという間に麵が半分なくなっていた。次々と食されていき、宿和が食い始めてから五分とも立たずに料理が全滅する。

そのあまりの速さに、あいた口が塞がらなかった。

「どうしたの？ 変な顔して」

「……いえ、その。空腹だったんだなあと思ひまして」

「うん、かなり。って、もしかして、食欲ないの？ なんなら私が食べてあげようか？」

言い終わるよりも早く宿和は衛護の冷やし中華目掛けて腕を伸ばす。直後。

「宿和さん、隠れてください！」

衛護の突然の叫び声に、宿和は伸ばしていた腕を引っ込めてテーブルの上に箸を置く。

「どう、したの？」

「使い魔からの情報で、このマンションの住人ではない男が今入ったようです。もしかすると襲撃者かもしれません。男が来る前に身を隠してください、早く！」

表情は相変わらず無表情だけれども、普段だしたこともない大声で、衛護の動揺が宿和に伝わったはずだ。瞬間的に彼女の貌が恐怖の色に染まる。ぎゅっと首許の、

食事を一旦中断する。一旦ではなく永遠になることだけは願ひ下げ。

居間を出て奥の部屋までやってくると、宿和をそこに閉じ込める。ピンポン、とそのときチャイムが鳴る。

「呪文（spell） 固定時間（fixed time）！」

小さな掛け声と共に、指にずきつと前よりも鋭い痛みが走る。魔術を扱ったことによるフィードバックだ。自分の手を見る。右手だ

けでなく左手にもあの、蒼い痣（stigma）が指に浮かび上がっていた。これで合計八つ目だ。

「ねえ、まさか……。また魔術を使ったの？ あれほど使ったら駄目だって忠告したはずだよッ！」

宿和の悲痛な叫び声が聞こえる。

無理やり決じ開けようと叩いたり引いたりするが、扉はびくともしない。

今度の魔術は扉全体にかけていた。以前扉にかけていた魔術とは違い、下位魔術の中でも割と強力な魔術で、本当なら合計五つ目の青い痣になるはずが、痣は三つ代償としたのだ。

衛護が得意とする魔術は時間系統。物であるならば、その物の時間を早めることも、戻すことも、遅くすることも、止めることも出来る。

発動した魔術は、時間を止めるというもの。氷のように固まった扉を開けるには、物理的に難しい。もちろん魔術でも同じだ。

「いいですか、宿和さん。よく聞いてください。もし僕一人で太刀打ちできなかったら、そのときは逃げてください。窓の外に使い魔を用意させておきますから」

優しく囁きかけ、衛護はその場を後にする。

玄関へと続く廊下に出ると、腰にぶら下げている銀色の鉛　スミス&ウェットソンを取り出す。

レバーを押して、弾倉に弾薬があるか確認する。充分に弾薬が詰まっていた。弾倉を再度装填して、安全レバーを外す。スライドを引いて、弾薬が薬莢に入ったのを音で聞き、グリップを握り締める。同じようにもう一つの拳銃　デザート・イーグルにも撃てる準備だけはしておく。デザート・イーグルの方は懷に仕舞い、いつでも取り出せるようにする。

スミス&ウェットソンはサイレンサーが付いているため、今回使用することにした。近隣に気付かれぬようにという配慮のもとだ。たとえ発砲するようなことになっても音は小さいから、大騒

動にはならないだろう。但し、いくらサイレンサーが付いていても完全に音を遮断することは出来ない。バレるのは時間の問題である。再度チャイムが鳴る。拳銃を握り締める力が強くなる。

「はい、どちら様でしょうか？」

『宅配のものですー』

「そうですか、少々お待ちください」

使い魔からの視覚情報を通して見ると、玄関の前に一人の男が立っていた。段ボール箱を両手で持って、衛護のことを待っている。

どうやら本当に荷物を届けに窺いに来ただけのようだが、衛護には心当たりが一切なかった。商品をネットやスーパーで頼んだ覚えはない。宿和が注文したのかもしれないが、それなら、彼女が買ったと教えてくれるだろう。

居留守を使ってもよかったと衛護は後悔する。だがもう遅い。

いることを伝えてしまったからには、出なければ不自然だ。相手かもし衛護たちを狙っていた襲撃者なら、玄関の扉を突き破られるかもしれない。そうなってからでは間に合わない。

先手必勝、それが衛護の戦闘手段である。こちらから仕掛けてしまえば相手の意表を突ける。襲撃者が魔術師ならば、呪文に掛かる時間を狙い、先に叩きのめせるからだ。そうなれば衛護の勝ちは見えてくる。

たとえ衛護の制止を振り切って宿和を襲おうとしても、衛護との一戦で、宿和を逃げさせることが出来る。

衛護は鍵を開けて扉を放つ。右手にもった拳銃は、後ろに廻して相手の視覚から隠した。

相手が魔術を発動するイミングだけを狙って撃つ。その瞬間を待ち続ければいい。

「遅くなつてすみません」

「あ、いえいえ。えっと、全識さんでよろしいですか？」

「……はい」

自分でも驚くほど低い声を出して、相手の質問に答える。

緊張の一瞬。

相手が自分を衛護だと知ったあと、どう行動するのか出方を見極めなければならぬ。全神経を集中させる。腕に力が入りすぎて、握っていた銃を壊してしまうのではないかと心配になる。

「あの、では荷物の方は……」

「置いておいてください」

衛護の指示で、一人一人が入れそうな大きさの段ボール箱を、床に置いた。

男に注意がいきがちだが、一番怪しいのはこの箱の中身だ。ここに誰かいたのなら、二体一で戦わなければならない。

そうなる厄介だ。

一族を襲った犯人が一人だとは聞いていない。むしろ複数の魔術師がいたのではないかと、衛護は推測している。複数の魔術師がこぞって発動したのなら、一瞬にして一族を滅ぼしたのも理解できる。あのとき、強大な魔術を衛護は感じていたのだ。殺しに来たのだと分かるには十二分に過ぎるほどに強力な魔術の塊が、屋敷へ目掛けて放出された。恐らく中位魔術。否、上位魔術に匹敵する呪文だろう。

「それでは、失礼します」

一言告げてエレベーターの方へ歩む、男。

玄関の前に残されていた段ボールを見下ろし、そして、男を注視する。

エレベーターのドアが閉まり、男を乗せたエレベーターは徐々に下がっていく。一度も止まることなく一階に着くと、ランプが点滅した。

共有した使い魔の視覚で、男が路肩に止めてあったトラックに乗り、走り去っていくまでの光景総てを見届けた。

念のためにトラックに使い魔を尾行させて、三百メートル付近まで遠のいたら帰らせるよう命令しておく。

まだ安心してはならない。

段ボール箱の中身がなんなのかまだ分かっていないからだ。

この中にもし男の味方がいるとしたら、その男と合わせて衛護と戦いに持ち込むのが普通だろう。二人でかかってこられたらいくら衛護でも太刀打ち出来ない。でもそうしてこなかった。ということは人にはいない。

人ではなく使い魔、あるいは爆弾といった殺傷能力の高い物が入っている可能性があるから危険性はまだ残っている。

「なんですかこれは……」

疑問を口に出さずにはいらなかった。

段ボールの真上に張られた用紙には、？集星学校から、鈴内校長より？と手書きで書いてあった。

「……学校？　どうして校長先生が荷物を配送したんですか……」
まさか、と頭の片隅に嫌な予感が過ぎる。

「あの優しい人が一族を襲った真犯人だというのはですか……？」
かぶりを振り、妄想めいた考えを追っ払う。

人は見かけによらないとは言うが、あんなにも優しい先生が一族を殺した殺人鬼だとは到底思えない。確かに、学校へその日の内に入学させてくれたのは怪しい。けれど、それは善意であって、決して悪意は校長先生の貌から窺えなかった。

どのみち開けて見てみない限り、解りようもないことだ。

校長先生に対する不信任は未だにあるものの、中身を確認したいという気持ちの方が圧倒的に強かった。

その不信任も、段ボール箱を慎重に開けて中を確かめると、安堵に変わる。

「そういえば、そうでした。自分としたことが、まさか忘れているとは……」

中には集星学校と刺繍された制服が、綺麗に畳まれていた。男性用だけでなく、女性用の制服もある。

今はつきりと衛護は思い出す。

鈴内校長は明日　正確には今日、制服を用意してくれると言っ

ていた。そのことを衛護はすっかりと忘れていたのだ。

登校日に間に合うように、校長先生は親切にも制服を宅配便で送ってきてくれたのだった。

頑なに握られていた拳銃を、ホルスターに仕舞う。段ボール箱を片手に担いで居間までやって来ると、どつと疲れが押し寄せてくる。緊張が緩和したせいだろう、力が抜けていく。

どんつという大きな音を立てて、手から段ボール箱が滑り落ちる。その音ではつと我に返り、奥の部屋へと小走りで向かう。

「呪文（spell） 準則時間（a rule of time）！」

手に馴染み深い痛みが走った。言わずもがな、それは九つ目の痣の徴。青色に染め上がっていく手は、自分の手だとは思えない。まるで怪物や幽霊といった、この世のものではない生き物のようだ。

魔術で止まっていた扉の時間が、正常な時間軸上に戻される。

宿和の反応が全くない。まさか、と不安になり、急いで部屋に入る。

大量の涙を流しながら嗚咽を漏らしている宿和の姿があった。

彼女の涙がぽつぽつと音を立てて、座敷の畳に滲み込む。

「……宿和、さん……」

「……ぐすつ、衛護……衛護……衛護……。生きてたんだね……、よかったあ。本当に、よかったあ……」

小さな手の平で懸命に涙を拭き取る。首にぶら下げていたネックレスを、祈るように握り締めている。

うわ言のように衛護の名を呟く宿和を見たら、胸がぎゅっと締め付けられた。

どれほど彼女を不安にさせてしまったのだろう。どれほど彼女を孤独にさせてしまったのだろう。

罪悪感と、やるせなさがごちゃ混ぜになり、気がついたら宿和の許に駆け出していた。小さな身体を引き寄せて、きつく抱きしめる。恐怖からか、それとも安堵からか区別の付かない震えが宿和を襲

っていた。

「ごめんなさい、宿和さん」

「……ううん。衛護が戻ってきてくれただけで、嬉しい」

宿和のか細い腕が、衛護の背中に廻される。

まるで、そこにいることを確かめるように。離れることを許さないように。

衛護と宿和は、登校時刻になる寸前まで抱擁していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1563z/>

All Of The World ~ それが総ての始まり ~

2011年12月5日20時08分発行